

# イギリスの国民投票結果に思う

イギリスの国民投票の結果は衝撃的であった。接戦とはいわれたものの方が「残留」を予想する中、蓋をあければ僅差で「離脱」が決定、株式市場や為替相場の混乱など世界中に衝撃が走った。極東の島国で直接政治的影響を受けることはない、しかし世界経済で緊密に結びついている日本にとって、今後EUがその経済的・政治的影響力を含めどのようになっていくか、どのような離脱交渉と意思決定プロセスを経て事態が進行していくかは経済・ビジネスの観点から大きな関心事であろう。また、グローバル経済・経営の観点からは、「政治リスク」ということが、世界的に台頭している「ポピュリズム」を背景に強く意識されてくるであろう。他方「政治リスク」の見方を超えて、グローバル経済下の格差拡大・国民内部での所得分配の問題と政治的意思決定の緊張関係は、イギリスにとどまらない問題であることも、強く意識しておくことが必要である。

「他山の石」として今回の離脱投票問題を見た時、民主主義の政治的決定におけるプロセスの質、「社会の分断化」による民主主義の脆弱性の進行ということも突き付けられた課題に思われる。機構的には「民主主義」の支柱は「投票」と「多数決」である。国民一人一人の平等という普遍的価値観を共有する共同体への信頼にそれは支えられている。イギリスの国民投票の衝撃は、「国民投票」という民主主義的な最終決定の仕組みが発動され、国民の亀裂を露わにしてしまったことである。もちろんイギリスは民主主義の価値を堅持し、国民の決定として受け入れたうえで、亀裂の走った国民の再統合に向けて茨の道を歩んでいくであろう。それは「民主主義」の力強い歩みであり、この普遍的価値に対する信頼を強固にしていくという全世界の希望の体現でもある。

「EU離脱が是非か」二者択一で問われれば普通困

惑する。本来、この問題は影響が多面的に現われる高度な判断である。それでも選ばなければならないとすれば、エイヤット自ら最も重要と感じる問題を選び、価値や利害により1票を入れる。「神の見えざる手」である共同体の集会的叡智を信じて。結果は出る。問題は、その多様な判断基準、何が最も重要と感じたかが、共同体で共有され、新たな合意・信頼が生まれていくプロセスだ。利害や価値観は多面的で、問題と一対一に対応しない。問題が特定されれば、対話により調整・変容が図られていく。人類が編み出してきた最大の叡智だ。この対話をどう機能させていくことができるかが最大の課題であろう。少数意見にも耳を傾け対話を尽くしていくことは「民主主義」の大前提である。このことは誰もが知っているが、現実実践していくことには多くの困難がともなう。「国民投票」という伝家の宝刀の抜き方がどうだったかということも含め、対話の実態を検証していくことが重要に思われる。

また、「社会の分断化」により、民主主義の命である対話が侵食されつつあることへどう対応していくかも課題として浮かび上がった。イギリスのように移民が焦点化されることは当面はないであろうが、個人が利害により孤立させられ、急速に進む超高齢化のもとで世代間対立があおられるなか高齢者の単独世帯も増加し、中間集団が衰退し、働く現場ではパワハラや安易な解雇・雇い止めに蔓延するなど、「分断社会」の危機は日本でも進行している。社会的連帯の再構築に向けて、職場における集団的労使関係・産業民主主義の強化、地域・生活現場での共同体の再生・機能強化は喫緊の行動課題であるが、これと連携する、民主主義を機能させる新しい社会対話の形をどう構想し構築していくかという新たなチャレンジの前に私たちは立っているのではないだろうか。

(連合総研主任研究員 中村善雄)